『源氏物語』における「暑し」について

――男女の亀裂――

相原咲清香

はじめに

『源氏物語』における寒暖の感覚に注目し、寒の感覚について、これまで三回に分けて述べてきた。[1] 今回は、視点を変えて「暑し」を取り上げ、作品中での働きについて考察したい。『源氏物語』には「暑し」一二例のほか、「暑かはし」五例、「暑さ」四例、「暑かはしさ」一例がある。なお、引用は「日本古典文学全集」『源氏物語』（一～六）により、巻数とページ数を付記した。傍線はすべて筆者による。

一　「暑し」と男君

まず、男君の例を見てみよう。箒木巻での空蝉との出逢いが、暑さを逃れ、涼を求めた場所でのものであったことは、前々稿[2]に述べた。続く空蝉巻の季節も夏であり、小君に導かれて紀伊守の留守邸へ赴いた源氏が、部屋の中にいる空蝉と軒端荻の様子を詳しく見ることができたのは、屏風や几帳などが畳んだり掛けたりしてあったからで、なぜそうしてあったかという理由を「暑ければにや」（一―一九三頁）という挿入句が示している。暑かったおかげで、源氏は、じっくりと、二人の女性を観察することができたといえる。

蛍巻・常夏巻では、源氏が玉鬘に戯れる場面に「暑かはし」という言葉が源氏の口から発せられている。[3]

宇治十帖にも、薫が、大君めあてに忍び入る場面がある。[4] 八宮の喪が明けた時、姫君達を見舞う形で薫が訪れるが、大君は対面しない。前回の訪問時に、薫が大君の所へ押し入ったからであった。

中の宮も、あいなくいとほしき御気色かなと見たてまつりたまひて、もろともに例のやうに御殿籠りぬ。（中略）まだけはひ暑きほどなれば、すこしまろび退きて臥したまへり。

（総角・五―二四〇～二四一）

二人して並んで休む際、「まだけはひ暑きほど」なので、二人の間に距離をつくることが不自然でなかった。「もろともに例のやうに」とあることや、薫を導く弁が「同じ所に大殿籠れるをうしろめたし、と思へど、常のことなれば、外々にともいかが聞こえむ」（二四一～二四二）と気を揉んでいることから、姉妹はいつも一緒に休んでいることがわかる。「すこしまろび退きて臥したまへ」る理由が、わざわざ「まだけはひ暑きほどなれば」と語られているのは、このために大君は中君から離れて休むことができ、薫が忍び寄ってきた時に一人這い隠れて中君を残す、という展開が可能になることを明示する。

これら二つの「暑し」に続く場面では、目標とする女性に逃げられ、

源氏も薫も想いを遂げることが出来なかった。が、残された女性への対応がそれぞれ違っている。源氏は軒端荻と契り、薫は中君と契らない。結局、大君亡きあと、薫は中君に執着することになるが、その時中君はすでに匂宮と結婚しており、薫の望みはかなわない。

蜻蛉巻で、氷を手にする女一宮を薫が垣間見るのも「いと暑さのたへがたき日」（六―二三八頁）となっている。

以上見てきたように、恋愛に関する場面での「暑し」は、暑さゆえに珍しい光景を垣間見ることのできた源氏や薫が、垣間見た女性にますます魅かれていく、という状況を支える条件となっているのみならず、宇治十帖の例のように、その後の展開をうながす条件としても活躍している。逢瀬を遂げることができたのは、源氏の空蟬との場合のみであり、この時は「涼し」の語が前面に出ていた。「暑し」のみの場合、主人公の心をかきたてはするものの、成就というところまでは、どうもうまく運ばないようである。

二　「暑し」と女君

次に女君と「暑し」の関係について述べる。藤壺懐妊の場合から見てみよう。

まことに御心地例のやうにもおはしまさぬはいかなるにかと、人知れず思すこともありければ、心うく、いかならむとのみ思し乱る。暑きほどはいとど起きも上がりたまはず。三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人々見たてまつりとがむるに、あさましき御宿世のほど心うし。（若紫・一―三〇七）

源氏の子を宿した藤壺の苦悩が描かれている。「暑きほどは」に続く一文のみが心理ではなく行動についての描写となっている。もともとの病気に加えて妊娠が重なり、しかも宿しているのは不義の子なのだ。藤壺の精神的重圧は、相当なものであったろう。「暑きほどは」の一文から、彼女の衰弱した様子がうかがえる。藤壺はやがて皇子を産み、中宮になる。桐壺院が崩御した後、再び言い寄る源氏に悩み、「はてはては御胸をいたう悩みたまへば」（賢木・二―一〇〇）と、またもや病気になってしまう。源氏を春宮となった我が子の後見として頼りにしなければならず、かといって恋心を受け入れるわけにはいかない。悩んだ末に彼女は出家を決意し、法華八講の果ての日に、御髪をおろした。さすがの源氏も手が届かなくなり、以降、源氏は春宮の後見として付き合うことになる。そのため、藤壺は落ち着きを得ることができた。

宇治十帖の宿木巻、中君の場合は、匂宮が六君と婚約したことによる心痛が描かれた直後の場面にある。中君がちょうど懐妊している事実が語られる。匂宮が、普段と違う体調の中君を見て、「ただ暑きころなればかくおはするなめり」（宿木・五―三七五）と思っている。ここでは、中君の不調は妊娠のためと受け取れる。しかし、この記事の前後は、匂宮が六君と婚約したことによる中君の苦しみの描写となっている。嘆き沈んでいても仕方がないので、人には心の内を見せないようにしようと、噂も聞かなかったかのような態度

で過ごしていた。結婚の日取りなどを余所から聞き、匂宮が自分から言ってくれないことも、中君には「心憂く」思えるのであった。匂宮が、夜離れに慣れさせておこうと、外の用もないのに帰ってこなかったりするのも、中君にはつらい仕打ちであった。

六君と結婚した翌朝、匂宮が中君を気に掛けて戻ってくる。匂宮の言葉「などかくのみ悩ましげなる御気色ならむ。暑きほどのことかのたまひしかば、いつしかと涼しきほど待ち出でたるも、なほはればれしからぬは、見苦しきわざかな」（三九六頁）には、中君の不調について「暑い時期だから」と彼女が言ったことになっている。がしかし、先ほど見たように、実際は中君がそう言ったのではなく、匂宮が暑さのためだろうと思っていたのである。匂宮には、自分が六君と結婚したために中君が体調を崩した、と言われるかもしれない、という後ろめたさがある。中君は、匂宮と六君との結婚についての心情を心の中に隠している。そうして、二人が直接心情をぶつけあうことはなかった。しかし、匂宮は中君が苦しむだろうと予測したからこそ言い出せなかったのだし、実際、中君は匂宮と結婚したことを後悔するほど悩んでいた。

六君との結婚の翌朝、匂宮が六君とのことを話す。それまで六君とのことを話題にするのを避けていた二人は、この時、初めて向き合って心の内を吐き出した。中君は泣き、匂宮は六君との結婚が自ら望んだものではないことを匂わせる、少々ずるい言い方をしながら、中君への愛を語る。向き合って話したことで、中君は以前に比べて、落ちついていく。

最初は、言葉での説明を伴わず、行動だけを先行させることによって、二人の溝は深まっていた。その際、中君が妊娠ゆえ普段と違う体調になったのを、匂宮は「ただ暑きころなればかくおはすめる」と理解している。このように、中君の場合、匂宮と六君との婚約に胸がつぶれる思いであっても、表向きは体調のせいにしておけた。そうすることで、嫉妬する様を見せないですんだかわりに、煩悶を自分の心の中に抱え込むことになってしまったのである。

他にも、若菜下巻の紫上の場合、懐妊はしてないが、病づいて五戒を受け、「涼し」の心境へとつながっていく過程で「暑し」という時期を過ごす例があることをつけ加えておこう。

おわりに

「暑し」という時期は、男君にとっては恋の高まりを覚える時であり、女君にとっては体調を崩す季節であった。女君は同時に精神的な悩みを抱えてもいた。この悩みは、男君の恋愛の行為に大いに関係がある。これらの例に共通する点は、男君に関して苦悩する女君の姿が「暑し」という時期に描かれ、女君が懐妊もしくは病気であることである。精神的な苦しみと、肉体的な苦しみが同時にくる。肉体的な苦しみのあるゆえに、かえって精神的な苦しみを女君の心内に留めることが可能となり、表だってこず、周囲に不審がられないですんでいる。時期が「暑し」といわれる、きつい季節であることも、

主体的には不快感の象徴でありながら、外目には女君が弱っている状態のカバーともなっている。

しかし、そうした場合、女君は心の内に沸き上がってくる苦悩を自分の中に閉じこめておくことになる。そして、周りの人々はもちろん、男君も女君の真の思いには気付かない。理解されないまま、すれ違っていくことをくい止めるためには、どこかで心の内が吐き出されなければならない。吐き出せないままに過ぎていく時、女君と男君は、お互いを思いやりながらも理解し合うことはなく、すれ違いの行動を重ねていくことになるのである。

夏の男君の恋愛が、多く、実らないのは、そのためではないか。空蝉や大君は逃げたわけであるから、男君の一方的な行為が空回りしていたといえる。こうした、女君を理解しないまま一人燃え上がっていく男君の恋愛感情と、そのすれ違いを「暑し」という語は集約しているといえるのではないだろうか。

＊　　＊

これまでに述べてきた『源氏物語』における寒暖の感覚についてまとめておこう。

まず、「涼し」「涼しげなり」「暑し」の語からは、男君と女君との対比が読み取れる。

男君は暑さを逃れ、涼しい場所へいった時、好奇心を覚え、そこから恋愛が始まる。女君は暑い時期に体調を崩し、同時に精神的な悩みも抱えている。体調の不調と重なるゆえに、精神的な苦しみは周囲の者に知られることなく、女君の内にとどめられる。男君にも理解されず、独り懊悩する女君が、苦しみの沼から這い上がることができたのは、男君に心の内を知らせた時、あるいは、出家した時であった。特に紫上について、「涼し」「涼しげなり」という語が、五戒を受けた後に頻出しているのは重要な意味を持つ。

また、「肌寒し」「冷やか」「寒し」「そぞろ寒し」について、これら寒の感覚に関する語は、登場人物によって使い分けがなされている。

「肌寒し」は、桐壺帝・玉鬘・落葉宮が感じる感覚となっている。桐壺帝と落葉宮の場合、愛する人を亡くした喪失感を強く感じる場面で、玉鬘の場合、筑紫から父だけを頼りに上京したものの、あてもなく不安にかられる場面で「肌寒」い風が吹く。

「冷やかなり」は、源氏・紫上・夕霧が、恋愛に関する切ない気持ちと共に感じている。紫上は女三宮降嫁の夜源氏を想って、夕霧は紫上に対しての思慕を抱いた時に「冷やかなり」を体感する。一方、源氏は、一人の特定の女性ではなく、夕顔・藤壺・六条御息所について「冷やかなり」と感じている。いずれも、相手のことを想って切ない気持ちを抱きながら、逢えないことを余儀なくされる場面である。

「肌寒し」と「冷やかなり」との違いは、前者が相手の存在を肉体的に恋しがる際に用いられるのに対して、後者は精神的な隔てを感じた際に用いられていることではなかろうか。また、「肌寒し」と「冷やかなり」を感じる人物の重なりはないことから、登場人物や状況

による使い分けがあることが確認できる。

「寒し」は末摘花の貧しい様子を象徴しており、源氏が見かねて世話をする際に使用されている。『うつほ物語』において「寒し」が男女の恋愛に関して使われている場合とは違っている。むしろ、先に挙げた「肌寒し」「冷やかなり」の方が、『うつほ物語』の「寒し」の使われ方に近いものとなっているのは興味深い。

以上が、主に恋愛に関して用いられていたのに対し、「そぞろ寒し」は趣を異にする。行事や死者と関わりのある場面に見られ、行事では源氏の素晴らしさに感動して震える人々の様子を象徴している。気候・風・水の要素とも関連がないわけではないが、源氏の繁栄を語る際の一つの重要なキーワードとなっているのが注目される。

これまで個々の場面で試みられてきた、寒暖の感覚の物語展開への関わりの方法は、若菜巻に至って、その効果が最大限に発揮されている。これについては、稿を改めて論じたい。

さらに、これまで何度か触れてきたすれ違いは、宇治十帖において、形を変えつつ、なお繰り返されていく。薫と大君、匂宮と中君、さらに浮舟・薫・匂宮の三角関係と、男女のすれ違いが、やはり寒暖の感覚を伴って描かれている。正篇を代表する若菜巻における寒暖の感覚の構造と特質は宇治十帖にも引き継がれ、この物語の根本モティーフを開示していることが読み取れる。

以上、寒暖の感覚は、『源氏物語』において、環境描写でありながら、人物の心理状態をも象徴する語となっており、かつ物語展開を促す重要なキーワードであることが明らかになった。「そぞろ寒し」は光源氏の繁栄を象徴し、その他の語の周辺には、男女のすれ違いと、それに伴う孤独な心とが浮かび上がって来る。これら、テーマと結びつく寒暖の感覚を表す語が、作品を貫いているのである。

〔注〕

(1) 「『源氏物語』における「そぞろ寒し」について――光源氏の繁栄――」(『古代中世国文学』12)、「『源氏物語』における「冷やかなり」「肌寒し」「寒し」「寒げなり」について――恋愛の交錯――」(『古代中世国文学』14)他。

(2) 「『源氏物語』における「涼し」「涼しげなり」について――恋愛と出家に絡んで――」(『古代中世国文学』13)。

(3) 野村精一氏『源氏物語文体論序説』(昭45 有精堂)にも、六条院で玉鬘に与えられた位置が夏であり、蛍巻について「その夏を迎えた。玉鬘の季節である」との指摘がある。

(4) 薫が暑さを逃れるため訪れた宇治で大君達を垣間見る場面については、注(2)掲出論文で述べた。ところで、宇治十帖が春と秋の季節を中心に展開することは従来から指摘されている。翻せば、宇治十帖で夏の季節が描かれることは特殊と言え、それが男君にとって恋の高まりを覚える季節として描かれているのは興味深い。

――あいはら・さやか、広島大学大学院博士課程後期在学――